

總有 中野云

一 大夫益方出家道性德治二歲丁未九月八日六十四 遷化大津山階葬ル (五五ウ)

一 嵯峨女病身出家高野禪尼 号正應五壬辰正月十日三十二歲遷化葬所黒谷有初有関東□西 居住云々

一 覚信尼公弘安十丁亥十二月二十三日五十七歲葬所丸山安養寺有

右之次第者山階寺與正寺之系図委細也今者略記之者也

尊師和讃全部五卷讚數五百三十八首卷每之終已上何十首何十紙 文字加之 (五六才)

凡此讚者慈信房善鸞公之直子聖人之御孫如信上人之作人王八十六代四糸院御宇文曆元甲午歲誕生次第嘉禎元乙未年聖人六十三歲入洛然值遇千大師在世二十有余之春秋也其性広智多才而不事修学唯未出難之意尤深恒侍聖人之学窓聽法累年直受口決祖師自利々他一代化導悉讚主心流入矣是以此奉讚者聖人入家之後隔十四年建治二之星為於知恩報德集之其編意丁寧預真佛頭智等常隨師傳詳見聞而故敬父善鸞公於大綱品差微細遂対決織龜 (五六ウ)

不容己直所令贊述也統高祖九旬行化括納比贊明鏡既備愚蒙何疑乎尊贊主師之法燈相嗣廣照於四海昏盲別化東関即於大綱創造一字

翻刻『尊師和讃』

自二十有九之比生涯居住此處曜法□救長夜而其有由致聖人蒙於觀

音靈夢人在東国化益盛矣由茲為令彼遠國門葉佛法相統且恋慕於師遺跡在彼處令行化矣然每年當報恩講砌凌於境関千里雲自奥州運步詣干洛陽東山本廟一七日念佛勤行御留主職宗惠公也然弘安九年上洛時覚如公十八歲之冬 (五七才)

信上人謁師弟契約厚而愍面受口決有同道即下向奥州燈々相嗣廣贊主師傳及西佛記見聞受口決略編於三五段傳唯是省略奇特□集肝要法味而已廣傳讓此贊也贊主即御本寺讓渡覚如公大綱坊嫡子浄如公付屬遷化者人王九十二代後伏見院御治世正安二庚子歲正月四日行年六十二歲於大綱坊化矣 (五七ウ)

以上

(工学部 一般教育学科)

余多ノ弟子達ハ 安陀□ヲ着セシメ

草鞋ヲハキタマヒテ 御棺ノ前後ヲ從ヘリ

尋有僧都モ奉送シ 山門ノ衆徒達モ

各儀式ヲ調ヘテ 風経ヲ勤メタマフナリ

禪房ハ長安羽翼ノ辺 押小路ノ南ニテ

万里ノ小路ノ東ヨリ 尋有僧都ノ里坊カラ

遙ニ河東ノ道ヲ経テ 洛陽東山ノウチ

鳥辺野ノ南ノカタ 延仁寺ニ葬シ奉ル

顯智恵心尋有坊 余多給仕ノ門徒達

葬所ニマヒリ奉ラレ 遺骨ヲ拾ヒタマフナリ」(五四オ)

太蜡上旬第六日 東山吉水ノ禪房ノ

近隣大谷ニ納埋タマヒ 石碑ヲ立テ拜礼ス

文永九年冬ノコロ 大谷ノ墳墓ヲ改メ

清水寺ノ北ノ辺リニ 仏閣ヲタテ影像ヲ安ス

干時文永九年壬申 相天二十八日ノ

正午日中ニ格テ 成功法讚修シタマフ

清和源氏三河守 蒲ノ冠者範頼ノ息女

藤原ノ在基郷ニ讓タル 玉河姫ノ莊園ヲ望ミ

阿堵二十貫ニ買取テ 覚信尼公ノ計ニテ

覚恵房唯善房兩人 寺務ヲ預置タマフ」(五四ウ)

已上九十首四十五丁

右此和讃者敵父善鸞於大綱遂対決誠惶々々所令讚述所也凡
聖人在世之奇異可盡翰墨也已後法務之事者記別紙者也後学莫
品色散説 兮

大綱慈信房在判

如信在判

建治二丙子歳古洗上旬染筆畢

右讚者洛陽四糸興正寺之有文庫在子細恩借者也努々不可有

他見者也

一 卯信上人者十八歳承久二辛巳歳七月二十六日遷化」(五五オ)

洛東北葬 岡崎刻 母影下 常州結城 善信対面聖人影像 讚シ玉フ

云々

一 昌姫号 小黒女房 文永七庚午歳五月十八日逝去越前葬所有壽五

十六歳

一 慈信房弘安九丙戌歳三月六日七十歳 遷化大綱葬所有如信上人

大綱御遷化葬所同

一 粟津信蓮房明信文永十一年甲戌十一月七日四十六 遷化葬所下

善法院ニ移住シテ 浮世ノ名残ヲ述タマフ
 満九十二及セテ 親服教誡シタマヘリ
 弘長第二壬戌 仲冬下旬ノ候ヨリモ
 イサ、カ不例ノ氣マシマシテ 行住座臥モ非常ナリ」(五二ウ)
 前方尋有僧都ヨリ 了阿房光正ヲシテ
 東国へ告ラル、フミヲ見テヨリ驚ル
 桑田ノ專信房ト 高田ノ顯智同道シテ
 江州守山ニ来着シ 善法房ノ使者ニ逢フ
 十九日ノ夜陰ニハ イソキ京着シタマヒテ
 庸席ニ悶哭スルホトニ 氣転ヲ 窮奉ル
 覚恵唯善ノ兩人モ 枕頭ニヲハシマスカ
 御君達ノ姿路モ 前後ニツキ傍タマフナリ
 中ニモ第七弥女ハ 十方ニクレテヲハシマス
 聖人這ヲ御覽シテ 余ニ愛嘆シタマフナリ」(五二オ)
 至心信業己ヲワスレ 一念決定ウタカヒナシ
 安養浄土ノ対面コソ 明日ヲモ不知此身ナリ
 慶喜金剛ノコ、ロサシ ナガキ離デナキアヒタ
 仏恩報謝悔怠ナク 吾ヲ慕テマヒラレヨ
 覚恵房ヲヨハセラレ 檀ノ上ナル肘鎖ヲ開キ
 央ナル物ヲ取出也 見レハ自作ノ真影ナリ
 吾ハ浄土へ還帰スル 身ノカハリヲ置テ行
 後日二人ノ訪ハ、 対面サセヨト仰ケル

二十七日ニハ沐浴アリ 專信房ニ命セラレ
 御髪ヲ剃セタマヒケル 顯智房ニ談話アリ」(五二ウ)
 平生持セタマヒタル 桐ノ念珠ヲ賜テ
 生テノ余風トヲモヒ 死テノ形見ト思レヨ
 顯智涙ニアキクレテ 安養ノ行詣近々ト
 拝礼申ス處ナレハ 面々障子ノ内へ入タマヘト
 覺了ヲ静声ニテ問タマヘハ ツ、マヤカニ問タマヒテ
 何事モ浄土ニテコソト 他事サラニナカリケリ
 権化ノ再来トハイ、ナカラ 肉身ヲ借用シタマヒテ
 衆生濟度ノタメニトテ 往相還相無窮ナリ、
 佛恩ノ深キ事ヲ威信シ □ニ余言ノアラハサス
 不退ノ称名殊勝ニテ 平生業成ノ覚悟ヲ□」(五三オ)
 人王八十九代ノ帝 龜山ノ院ノ御宇ニ
 仲冬下旬第八正午 頭北面西右脇ニナシ
 念佛ノ声断絶シテ 本國ニ帰寂シタマヒケリ
 紫雲西方ニ懸懸シテ 清天白日光ヲ曇ス
 常随給仕ノ真弟達 緇素老少諸共ニ
 各貴前ニ俛テ 余風ノ涙ヲ流シケル
 前後左右ノ門人達 仏日既ニ没シタマヒヌ
 法燈斯ニ消ヌルト 悲声サラニ止コトナシ
 翌日二十九日卯ノ尅ニ 送葬ノヨシヲフレナカス
 御棺ハ顯智房ト專信 前後ヲ□奉ルナリ」(五三ウ)

此權現誰人ソヤ 件ノ僧弁答セリ

善光寺ノ生身如来ナリト 定禪合掌又手シテ曰ク

去ハ三国伝来ノ生仏ト 身軀 堅テ恭敬礼拜ス

当坊ニ参籠シテ 懼瞋シ奉聖僧

夢中ノ神體ニ差ナシトテ 随喜感嘆黠フカシ

又御頭許ヲ 模ニ満足ト 夢想ハ仁治三年壬寅

九月二十日ノ夜陰ナリ 聖人弥陀ノ来現炳焉ナリ

聖人七十一歳二歳 浄土和讃高僧和讃

両部草案シタマフナリ 清書再治ハ四年以後」(四九ウ)

七十三四五ノ春秋ニ 東国ノ門人来参ス

慈信房善鸞上人 両度マテ見参アル

七十六歳ノ蒼精ニ 両部ノ和讃再治アル

七十七八九歳ニハ 藝州へ御下向ナリ

宮嶋へ参詣アリ ソレヨリ書写へ越玉フ

上洛ノ道スカラモ 勅化休息ナカリケル

高砂尾上ノ松下 曾根ノ松影 清ク

須磨明石ヲ順見アリ 坂陽天王寺へ寄玉フ

八十相月ノコロヲヒハ 諸経ノ文類ヲ集参シ

又八十一歳ノ春ニハ 愚禿鈔草案シタマフ」(五〇オ)

八十二歳ノ御時ハ 正像末和讃ノ草案

八十三歳ノ中律ニハ 後世物語ヲ記シタマフ

建長八年丙辰 純陽上旬夜寅ノ候

釈ノ蓮位夢想ノ告ニ 上宮皇子聖人ヲ礼シテ

敬礼大慈阿弥陀佛 為妙教流通来生者

五濁惡時惡世界中 決定即得无上覺也

宝積如来ノ化現ニテ 大師ノ本地ハ明白ナリ

未来ノ有情ヲ救ト 高慢邪見ヲ降伏セリ

十五歳ノ春秋ニハ 岡崎ニ逗留有テ

復月ノ中旬コロニハ 西方指南鈔ヲ書給フ」(五〇ウ)

大師八十六歳布訛 梅潤五日夜五更ニ

西ノ洞院ノ御坊ニテ 自画ノ御影尊前ニ

顕智房ヲ召寄テ 安心口決ノ相傳アル

今年秀秋下旬ノ比 正像末和讃清書セリ

同年窮陰冷節ニ 富ノ小路ノ禅房ニテ

二十一通ノ口決モ書シ 顕智房へ授ラル

正元元年八十七歳 仲呂上旬ノコロヨリ

諸方ノ真弟呼タマヒ 安心口決相傳アリ

八十八歳端月ニハ 鵝木へ廟参マシマシテ

大師上人ノ恩徳ハ 滄溟カヘリテ浅□□□」(五一オ)

迷慮八万ノ頂ニコヘ 恒沙ノ身命ヲ碎トモ

如何シテカ報スヘキト 血涙ヲ流テ謝シタマフ

聖人帰洛六十三歳ヨリ 八十九歳ノ呵凍マテ

諸国へ遣給ヒケル 消息九十二通ナリ

洛陽三条坊門ノ北 富ノ小路ノ西側

西ノ洞院ノ御坊ニテ 対顔ヲ御免アル
 昔日花城ニ赴タマフ 武蔵ノ矢口ニテ暇
 教風弘道ノコトハリヲ 委細ニ仰聞ラレタリ」(四七オ)
 情奥陸へ下リテ 是心寛円无為心等
 立川表ノ邪義骨張 颯ク降伏セシムヘシ
 常州那荷郡大部郷 平太郎トイフ庶民アリ
 地頭ノ役ニ駆仕セラレ 紀州熊野ニ参詣ス
 專信ニ二心ナカリキ 事ノ由致ヲ尋ト□
 五条西ノ洞院へ参リ 聖人ノ教誡ニアツカル
 件ノヲモムキ言上ス 聖人細ニ示化シタマフ
 證誠殿ノ本地弥陀如来 垂跡ノ化儀 崇ナリ
 内懷虚仮ノ身ナカラ 賢善精進ノ威儀
 凡身境界トシテ 更ニ不淨ヲツクラ□ヘカラス」(四七ウ)
 神明ヲ 輕ニアラス 和光同塵入佛智見
 本願弘誓ニ帰セシメン 努々忝惶ヲメクラサ、レ
 是ニヨリテ平太郎 権現へ参仰ス
 凡情雜居ノ有躰 道中 奉儀ナシ
 無為ニ参着シケル夜ニ 證誠殿ノ扉ヲ開キ
 衣冠正キ俗人出テ 平太郎ニ示悔シタマフ
 汝何吾ヲ忽緒シテ 汗穢不淨ノ躰ニシテ
 神前へ参詣スルヤ 誰人ノ許容ソヤト
 尔時聖人忽尔トシテ 拝前へ顕現シタマフ

翻刻「尊師和讃」

臣ハ善信カ教化ニヨリ 念佛スルモノナリト」(四八オ)
 於ニ俗人笏ヲ又シテ 歿ニ屈敬ノ礼ヲ重シ
 内陳ヘカクレタマフカ 維又珍事ノ不思議ナリ
 下向ノ後参上シテ 大師ニ対テ申ケレハ
 聖人微笑シタマヘリ 己妙秘ノ靈現ナリ
 尊師六十九歳春秋ニ 宝積寺ニ参詣□□
 金龍寺千観内供 勝尾山ヘモ登ラセラル
 源空聖人ニ階堂 善導大師ノ影向
 勢クラヘノ二尊像 開成皇子四方ノ松
 善仲善等ノ旧跡 證如上人ノ殊勝信
 行准法師ノ奇特 ノコラス拝見セシメタリ」(四八ウ)
 帝都へ還御ナリタマヒテ 岡崎處々ニ往返アル
 禁闕ヨリメサレテハ 出離ノ要路ヲ問タマフ
 御歳七旬ノ俗蘭ニ 関東河田ノ入西房
 大師聖人ノ真影ヲ 博写シ奉ラント
 年月ヲ経許ニ 聖人深識ヲ瞋テ
 禅定法橋ニウツサシムヘシト 唯円房鑑察ヲ随□□
 即チ法橋ヲ召請ス 禅定左右ナク参リヌ
 尊顔ニ对奉テイフヤウ 去夜奇特ノ靈夢ヲ感ス
 貴僧二人来入セリ 一人ノ僧ノ言ク
 此化僧ノ御真影ヲ 猫疏シ奉ラント思フナリ」(四九オ)
 怖ハ禅下筆ヲクダスヘシト 定禅問奉テイハク

嘉禎元年正陽下旬ニ 伊賀近州ニ慣格□□

木部邑ノ天王堂ニ寄タマフ 翌日堂寺ヲ出謝セリ

同野長石左衛門 友連友貞兄弟ニ

梵天帝釈ノ勅命ニテ 前夜不思議ノ示現アリ

閻浮界ノ衆生ヲハ 濟度利生ノ方便ニ」(四五オ)

阿弥陀佛ノ来現ナリ 年来師ヲマツコト尚シ

住僧善性房大円ト 長石左衛門親子ト

聖人ヲ追カケ奉リ 上ノ靈示ヲ詔スル

尊師仰ラレテ言ク 吾モ靈現 蒙ナリ

何ソ空ニ通ルヘキト 善性房ニ許諾セ□

霞ノ浦ヨリ上リケル 隨身ノ弥陀如来ヲ

毘沙門堂ニ奉納シ 隣里ノ人民教示セリ

其後天人来降シテ 錦ヲ織ノ瑞在テ

此事雲上ニモレ聞ヘ 錦織寺ト勅号ス

已上百十二首五十七丁」(四五ウ)

同年葉月上旬ニ 大師聖人入洛セシメ

岡崎ノ御坊ニ容タマフ 道俗男女参賀セリ

當院ハ二十余年 无住零落シケルヲ

摂政殿ヨリ補造シテ 修衲結構シタマヘケ□

伊達善然房幽好ハ 勢州川曲ニ置タマヘルカ

同年十一日京着シ 大師聖人ニ拜謁シテ

九条殿下ノ御許ヨリ 西ノ洞院ノ御所

慇懃ニシツラヒテ 其地ニ移住シタマヘリ

顕智善念善信房ハ 随從論□ヲ申サル、

尊師聖人ノ仰トシテ 東国へ下向ナサシムル」(四六オ)

真佛性信ニ合体シテ 念佛弘通シタマフヘ□

善念房ハ伊勢ヘカヘラレ 未熟ノ者ヲ教化セヨ

同月下旬ノ比ヲヒニ 蓮位性信上洛セリ

此兩人道ヨリカヘシタマヘトモ 聖人京着ノ見舞ナリ

性真房ハ横曾根ヨリ 蓮位房ハ高田ヨリ

真佛房ハ名代トシテ 聖教トモヲ持上セリ

東国ノ門葉タチモ 孜欲トシテ上着シ

面々拝賀ヲ喧テ 欣豫ノ間ソナカリケル

皐月中旬ニ真仏房 上京セラレケルホトニ

岡崎ノ御坊ニテ 対面ヲトケラレタリ」(四六ウ)

顕智房ヲカハリトシテ 東国へ下サシム

神力如意ノ旅程 早速高田ニ降着ス

愛景中旬ニナリヌレハ 真佛高田ニ下向シテ

鹿嶋ノ順信房上京ス 遠江ノ国ニツキタマフ

鶴ヶ見ノ宿ヨリモ 専信房同道シテ

参州桑子ニイタリ 念佛房ヲトモナヘリ

聖人六十六歳朔易ニ 高田ノ専空房上□

平等ノ大慈悲心ハ イカテカ吾ヲ捨タマフ
 木石同時ノ者ナリトモ 結縁アラセテ捨タマヘ
 聖人ソノ時言ハク 天晴ナルカナ幼童
 今ハ何ヲカツムヘキ 子細ヲ示教イタスヘシ
 不脱衣食ノ理ヲ 懃懃ニ説法シテ
 深甚義妙ノ法用ヲ 委ニ教化ナサシメリ
 経時巨ニ象仰シ 感涙肝ニ銘シツ、
 妙弁深秘ノ法門ヲ 理ヲ既テ漢タマヘハ
 コ、ロ堅ニ勇猛シ 尊重□請シタマヒテ「(四三オ)
 品々ノ珍饈トリソロヘ 種々ノ馳走止コトナシ
 聖人元帥北条泰時ト 遑享シテ出御アリ
 豆雨中旬第六日 江津ニ還御セシメケル
 翌日夏鄧ニ帰タマフ 蓮位房モ性信房モ
 箱根ノ坎下デ暇ヲタブ 各々常州ヘカヘラル、
 聖人嶮山ヲ越タマウカ 十六夜ノ月モ孤嶺ニ偃ハ
 戌臣ノ扉ニ踏テ 案内ヲ敬白スル
 嵬翁一人出向テ 聖人ヲ惶恭シテ
 今夜杜廟ノ拜前ニ 神巫トモノ旂參ス
 翁モ中ニ問リツルカ 権現風シメタマフコトアリ「(四三ウ)
 誠惶屈敬シテ診祗セルニ 不幻非夢ノ寓言ニ非ス
 台尊敬スヘキ客人ノ コノ陳ヲ通リタマフヘシ
 懃懃ノ忠節ヲ抽テ、 丁寧ノ饗應ヲ儂假スヘシ

翻刻「導師和讃」

示現イマタ覚竟サルニ 貴房忽焉ト来臨ス
 何ソ尋人ニテマシマサン 神勅コレ懃審ナリ
 感應ハナハタ恭恭スヘシト 尊重屈請シ奉□
 品々タル飯食ヲ供ヒ 色々ニ珍味ヲ調ケリ
 聖人箱根ヲ下タマヒ 駿州ニ帰赴セシメ
 安倍川ヲ渡リテ 東岸西岸ノ道俗ヲ幼ム
 授衣下旬ノ黎ニ 遠州桑田ニ行却シテ「(四四オ)
 專信房カ宿ニツキ ソコニテ歳ヲ越タマフ
 桜ノ池ヲ順見シ 本山ノ徃ヲ像ヤリ
 功德院ノ源光阿闍梨 水定観ヲ唱タマフ
 遠江ヲ過タマヒテ 参河ノ国ニ入タマフ
 桑子柳寺ノ小堂 六七月ノ逗留アリ
 念信房ヲ始トシテ 道俗男女来集ス
 聞法ノ場市廊ノ如ク 万木千山動揺セリ
 美濃尾張名古屋 在々ヲ経廻セシメ
 勢州渡會ニ赴キ 外宮内宮順見アリ
 神裳衣川ノ流モ清ク 和光同塵ノ結縁「(四四ウ)
 一百二十ノ末社等 垂跡ノ化儀ニアラハセリ
 外宮ハ炎々出見ノ尊 内宮ハ天照皇大神宮
 能仁寂黙ノ分身ニテ 本地阿弥陀如来ナリ
 岩戸ノ奥モ夜明ト 神體ノ面目明カニ
 八功德ノ池ノ波ニ 五障ノ垢穢ヲス、ク

六十一歳難月上旬 相州足柄ノ下郡

江津ノ南浦ニツキタマフ 近辺ノ道俗群集ス

或時ヒトリ居士来リ 大師ヲ拜聴シ奉ル

此所ニアヤシキ石ノ有ケルガ 時々動揺スルコトアリ

隣里ノ人々怖ヲナシ 往来ノ貴賤モアヤシミテ」(四〇ウ)

農業ノカマヒト成ケレハ コノ事聖ニ言上ス

聖人靈石ヲ視シ 南無不可思議光仏ト

八字ノ尊号書タマフ 其後恠事止ニケル

江津掛錫ノ中間ニ 鎌倉ニカヨハセテハ

谷々 幼化 荐ナリ 高貴卑賤尊仰ス

元帥北条義時ハ 三井寺ノ奉納藏

一切経七千余卷 頻写法師ヲ撰ハル、

君凌凍玄ヲ制書 鉄釣銀刷ノ作法シリ

都鄙ヲウカッテ召集シ 煩六十余人ナリ」(四一オ)

酷暑下旬ノ五月ヨリ 霜辰ノ初メ事成ヌ

校□法師ヲ穿鑿シ 京鎌倉ヲ論措ス

武蔵守長時進怯ス 當国ニ日本無双ノ明□

善信法師トイフアリ 唯今三浦ニ逗留セリ

同宿ノ衆徒隸ニハ 蓮位性信慈信房

頭智専空真佛房 唯信無為善性房

綾和一之谷小栗之津 笠間狗飼南之庄

婆陀體毘ノ発明達 烏兔ノ施テ狡合ス

閑静寂莫ノ挽ニ 將軍家馳走ノ粧

善尽美ツクシテ 恩調ノ懇懇言ナシ

北条経時九歳ニテ 元服ナサシメタマヒケル」(四一ウ)

理髪ハ陸奥守長時 加冠ハ將軍頼経ナリ

幼名ハ亀千代殿 時々経闍ニ来臨ス

供饍ノ躰ヲ見タマウカ 不審コソヲモハル、

聖人妻帯肉食シテ 真俗不二ノ妙門ヲ開キ

體折巧拙方便土 苦楽自在ノ大悲ナリ

八宗九宗ニ独歩シテ 心行所滅ノ不可思議

深秘無窮ノ化導ニテ 管見ノ窮トコロニ非ス

戒定恵解脱々々知見 三世諸佛ノ冥照覽

上求菩提ノ得益ニテ 下化衆生ノ方便ナリ

五人法身ノ香ヲリハ 段々トシテ薫発シ」(四二オ)

中道府藏ノ妙法藥 毒発不定モ差治セリ

銷膳ノ躰ヲ見タマフ時 諸僧ハ袈裟ヲ脱タマフ

大師答シテノタマハク 衆僧ノ常式殊勝ナリ

珍饍タマタマ成ユヘカ 吾ハ忘却イタシケリ

翌朝ノ配膳拜見ニモ 千代丸コ、ロヲツケタマヘハ

他僧ノ法式カハラネド 大師一人袈裟ヲカク

件ノ謂ヲ復トハク 尊師コタヘテノタマハク

老衰ユヘニ復失念ト 幼童ノ分トシテハ

スコヒタル事ヲ問モノト 便ナク思ヒタマフラメ」(四二ウ)

尊師高田ニ逗留アリ 拜礼ノ不足ヲ哀テ
 瞑暗ニ涕泣スルホトニ 聖人コレヲ哀ミケル
 或日明鏡一面ヲ送玉フ 老尼コレヲ拜聴ス
 不思議ナルカナ鏡中ニ 大師ノ影像アキラカナリ
 緇素ノ伝聞スルホトニ 日々ニ参集カスシラス
 貴賤老若チマタニアフル 奇特ノ思ヲナシニケリ
 聖人鹿嶋ニカヘラセテ 霞ノ浦辺ヲ教化アリ
 漁父トモノ申シケルハ 海上ニヲソロシキ光アリト
 善師アヤシク思召ス 翌日汀ニ出タマヘハ「三八ウ」
 件ノ恠光タチマタニ 漁父網ニ引アカル
 聖人はヲ見タマヘハ 金色ノ弥陀如来
 吾ニ有縁ノ仏ナリト 守ニカケテ隨身ス
 花老下旬ノ犁ニ 教行信證ヲ清書ス
 綾衣ニイタリテ功ナリヌ 真宗念佛ノ要路ナリ
 同年星月上旬ニ 越後井東ノ顯智房
 同ク桑佃ノ專信房 初テ大師ニ帰伏セリ
 大内ノ三男專空房 聡明俊智ノホマレアリ
 幼稚ノ時ヨリ佛道心 ツイニ尊師ノ弟子トナル
 鶉尾下旬ノ晝烟ニ 稲田ノ郷ヲ出行シ「三九オ」
 高田ニ移テ教化セリ 崔微門前市ヲナス
 一日白衣ノ老翁来臨ス 聖人ヲ捨爾シテ申ス
 頃数日ノ教化ヲ受ケ 身心肝ニ命シケル

翻刻「尊師和讃」

顯ハ御剃刀ヲ戴匄セン 大師コレヲ理享シテ
 真弟ニ断説シテ 更声信海房ト阨セシム
 件ノ老翁祝涙シテ 東南ニ應テ謝ホトニ
 鹿嶋ノ神籬ニ泯没ス モットモ奇異ノ化ナリ
 其後祝部会合シテ 社頭ヲ開帳スルコトアリ
 神体ノ左傍ヲ見レハ 法名ノ榜カ、リタリ
 大師聖人ノ化導コソ 神慮ニカナヒタマフユヘ「三九ウ」
 不可思議ノ瑞現ハ 尊崇心行所滅ナリ
 孀年五十八歳ノトキ 笠間ノ土民カ方ヨリモ
 小粟二百粒ハカリ 聖人へ献上セリ
 尊師スナハチ喜悅シメ 東南ノ山腰ニ植タマフ
 世用テコレヲ称美ス 三度栗トナツケタル
 次歳桂月ノコロヨリモ 相州鎌倉ニカヨヒタマヒ
 谷七郷ノ所々ヲ 化導ノタメニ經迴ス
 聖人御捨六十歳 貞永元年壬辰
 大簇中旬第五日 真佛房ヲメシタマフ
 阿弥陀寺ノ住持職 遺禪セシメタマフナリ「四〇オ」
 顯智專空性心房 イツレモ承知セシメケリ
 同稔商音月上旬ニ 聖人高田ヲ立出テ
 華城ニ赴タマヒケリ 御供モ已上四人ナリ
 顯智專信善念房 飯沼ノ性心房ナリ
 真佛專空兩人モ 武藏ノ矢口デイトマヲタフ

第二日ノ夜半計ニ 一家不睦期居スレハ
 妖艶タル女房ノ 罅ヲ破テ出タリケル
 大師ヲ投地礼敬シ 感涙ニムセヒ申スヤウ」(三六オ)
 明道化益甚深ニテ 火盆地獄ヲマヌカレタリ
 清涼世界ニ至ルユヘ 蓮華部ノ教主世尊
 凡地ニ降リタマフコト 大恩ハナハタ謝シカタシ
 元仁元年夏拙ノコロ 稲田ノ草庵ニ在テ
 教行信證ヲ撰述ス 清書ハ五十六歳□□
 大師御歳五十三 芳時八日ノ暮方ニ
 下野ノ国芳賀郡ノ 大内ノ庄ヘ独歩セリ
 野中ニ平石一牧アリ 聖人石上ニ居住シテ
 念佛申テ明セリ 明星ステニ出ントスルニ
 天童一人来セリ 柳枝ニ白砂ノ包モノ」(三六ウ)
 左手ニ持添盤桓ス 東西ヲ廻テ謡ヒケル
 白鷺池ノミキリニハ 一夜ノ柳枝青シテ
 般舟ノ磬ノミナミニハ 佛生国ノ種生スト
 シハシハ吟シテ北ヘ去ク 聖人問テノタマハク
 天童ハ何人ゾヤ コノニ詠哦シタマヘル
 童子コタヘテ申スヤウ 我ハコレ明星天子ニテ
 本師極楽ノ聖衆 虚空藏菩薩ナリ
 伽藍ノ霊地ヲ教ユヘシ 野州柳嶋ノ水田ハ
 往昔釈迦文如来ノ 転法輪ノ梵区ナリ

精舎ヲハヤク建ラレヨ 印度白鷺池ノ柳枝」(三七オ)
 霊山会上ノ菩提枝ト 二品ヲ大師ニ授タリ
 聖人柳枝ヲ水田ニサシ 菩提子ヲ平石ノ涯ニ植玉フ
 暁天ニ至テ見レハ 枝葉四方ニ布リタリ
 涌泉四渠ニナガレテ 中央凸然タリケルカ
 高堅ノ地盤トナルホトニ スナハチ高四ト名ケタリ
 桓武天皇ノ苗裔ニ 鎮守府ノ將軍国香
 後胤大内左京国時 下野ノ郡司真岡ノ城主
 同姓舎弟国行ト 大内真壁小栗相馬
 四家ノ一族モヨフシテ 竹木土砂ヲ集メタリ
 諸国ノ大名与力シテ 程ナク伽藍ヲ建立ス」(三七ウ)
 後堀河ノ院宣ニテ 阿弥陀寺ト號号アル
 同年青和ノ十五日ニ 信州ヘ歩行シタマヒテ
 善光寺ヘ参詣アリ 通夜渴仰マシマシケル
 夜半乗ノコトナルニ 内陣鳴動スルホトニ
 不思議ナリト驚カセ 譚演トシテ候矚ス
 如来スナハチ影向シテ 聖人ニ瑞格シタマフ
 這一躬吾分身ナリ 一切有情ニ跪沓セヨ
 大師生身ノ如来ヲ拝シ 野ノ下州ニ帰着シテ
 阿弥陀寺ニ安置セリ 不思議トイフモ余有リ
 同年綾衣下旬ノコロ 常陸ノ国稲田ノ郷ニ」(三八オ)
 信心ノ老尼アリテ 大師ノ化益ヲ仰キケル

諸宗超過ノ法門ト 感伏セストイフ事ナシ
鹿嶋ノ祝部尾張ノ守 中臣藤原ノ信近

コノ不思議ヲ聞ヨリモ 聖人ノ化導ニ記入セリ

感心止コトナキ余リ 子息信弘ヲモツテ

大師聖人ニマヒラセ 師弟ノ契約アサカラス」(三四オ)

順信房性光ト下サレテ 常随昵近シタマヘリ

聖人綽公ノ後身ナリト 靈夢ヲ感ゼシ是人ナリ

四十九歳ノ秋ノコロ 常州柿ノ岡ノ辺ヨリ

板敷山ニ通ヒタマヒ 山中山下ヲ化導セリ

已上百十八首五十九丁

コ、ニ同国上宮ノ邑ニ 修験ノ行者アリケルカ

播磨ノ僧都弁円トイフ 聖人ノ教化ヲ嫉妬セリ

大師板敷山ヲ通リタマウニ 度々相待トイヘトモ

サラニ時節ヲトケス 无念ノ怨嫉ヤムコトナシ

情事ノ参差ヲ案スルニ スコフル奇性ノ思アリ」(三四ウ)

聖人ノ庵室ニマヒリ 直ニ愁憤ヲトケント

稲田ノ禅坊ニ案内ス 聖人素眼雉衣ニシテ

左右ナク出逢タマフ 尊顔ヲ拝シ奉ルニ

日比ノ害心消失セリ 庭場ニ臥伏テソ

件ノ鬱憤述ケルニ 聖人惟^鼻ノ気色ナシ

翻刻『尊師和讃』

立トコロニ弓矢ヲ碎キ 刀杖ヲナケステ、

改悔涕泣スルホトニ 邪見ノ本名アラタメント

入仏道ノシルシニハ 法名新ニ観^イウケテ

明法房證信ト下サレ 猶原ノ里ニ居住セリ

常随給仕ノ弟子トナリ 化導ノ与カト成ホトニ」(三五オ)

六十八奇特ノ往生トケニケル 御真翰ニ染タマフ

五十紂^キ歳ノ又記ニハ 總野ノ式邦ヲ行脚シテ

鹿嶋行方教勸シ 化益月々昌ナリ

與沢ノ里ヲ通タマヘハ 枚田ノ八郎□イツモノ

庶民ノ辱^{セン}夫有ケルカ 出迎テ言上□

愚妻去ヌル^コ犁ニ 産難ニカ、リテ喪^セタルカ

亡魂魄毎夜来テ 猛火ヲ吹テサケフナリ

修験ノ僧ヲ頼ミツ、 経卷陀羅尼ヲ誦誦シテ

加持祈禱止コトナリ 追善ヒマナクツトムルト

今更シルシモナキ程ニ ソノ有サマコソアサマシケレ」(三五ウ)

隣里郷党怖ヲナス アハレトイフモヲロカナリ

大師化雨ヲソ、カセテ カレカ曠^ク恙ヲ止メタマヘト

雨涙ト申シアケ 悲泣袂ヲシホリケル

聖人惟^コヲ応諾シ 滂^{ケイ}聒ノ磧^{ウツ}横ト^{ウツ}寄テ

三部ノ妙典薰銘シ 彼力堂家ニ埋セリ

不思議ナルカナ連疾ニ 墓^ホ壘ニ^{ウツ}嗚呼^{ウツ}声ノシテ

猛火数丈燃アカリ 忽チ消テ音モセス

水神出テ災害ス 人民ノ煩ヒ困窮セリ
 尊師方便シタマヘカシ 仏子領状マシマシテ
 是ハ一化ノ幸ナリト 友宗カ方ニ行タマフ
 郡司屈敬崇重シテ 沢池ノ辺ニ引導ス
 聖人湫往ニ逗留シテ 三昼夜ノ誦經ナリ
 黄昏ニ疾風スサマジク 池水ミナキリ涌揚ル
 ヒトリノ女人浮出セリ 郡司ヲノヲノ驚嘆ス
 婦人聖ヲ礼敬シ 涕泣スルコト暫時シテ
 ワレハ前世富豪ノ婢妾 邪見ノ報ニ沈水ス」(三三二オ)
 今ハ大地ノ身ヲ受テ 瞋火痛苦ノ堪カタク
 朋妾殺害ノ業ニヨリ コノ淵底ニ沈倫ス
 大師法雨ヲソ、カシメ 三熱ノ焰消失ヌ
 今三月ノ法力ヲ ワレニ施シタマフヘシ
 切利ノ雲ニウチ乗テ 上天ノ冥衆トナルナラン
 妙華ヲ雨シテ供養セン 聖人コレヲ応答セリ
 後日暁天ハレケレバ 風ヲモムロニ吹上リ
 雲立ノホルソノ中ニ 件ノ女人天乗ス
 曼陀羅華ヲ雨シテ 聖人ヲ供養セリ
 カタヘノ人々嘆異シテ 感涙肝ニ銘シケル」(三三二ウ)
 ソノ後小嶋ニ還向シ 稲田ノ郷ニ移ラシメ
 草庵ヲ占タマヒテ 化導□□盛ナリ
 幽棲ヲシメタマヘトモ 道俗蹟ヲタツネ

蓬戸ヲ用トイヘトモ 貴賤阡陌ニ溢ル
 四十七八歳ノ兩茲ニハ 常陸下野下総ニテ
 鹿嶋行方柿ノ岡 南庄国府ナントヲ經迴
 今歳寿歳ノ中旬ニ 鳥ノ巢ニヲモムカシメ
 性惡ハ良將監トテ 不敵無道ノ山賊ナリ
 同朋ノタメニ殺サレテ 火ヲ焼コト毎夜ナリ
 諸山衆寺ノ名僧達 秘術ヲ尽シテ祈ラル、」(三三三オ)
 四十余歳魔境ニ入り 妖性ハナハタ怖ク
 加持ノ僉モナキユヘニ 数月空シクスキニケル
 絃閩ノトモカラ嗟嘆シテ 法雨ヲソ、キタマヘカシト
 尊師ノ前ニ屈請シテ 從類泗涕ニシツミケル
 聖人コレヲ憐ミテ 波ニアラユル□□□□
 浄土三部妙典ヲ 一々次第ニ書タマフ
 事ステニ満足シテ 妖靈カツカニウツマシメ
 化為清涼風ト称ヘシメ 南无阿弥陀佛ト迴向セリ
 若在三途勤苦之處 見此光明皆得休息
 无□苦惱寿経之後 皆蒙解脱无量寿佛」(三三三ウ)
 炳墟忽チヲサマリテ 培内ニ妙声シテイハク
 獄城ノ火器破列セリ 經奉納ノ功力ナリ
 安樂世界ニ往詣セン 今ヨリ妖災アルヘカラス
 明師ノ法力アリカタク 成佛得脱ウタカヒナシ
 貴賤縑素コレヲキ、 弥陀願力ノ方便ハ

一字ヲ草創アルヘキカト 所存ヲ委ノヘラル、
 聖人許諾マシマシテ ツキニ堂舎ヲ建立ス
 落慶ノ導師ハ源海房 東関ノ下向ハ秦正ナリ」(二九ウ)
 数季ヲ経過シタマヒテ 真佛房ニ命セラレ
 勅号ノ義ヲ奏達ス 興正寺ト宣下セリ
 大師満足シタマヒテ 真佛聖ニ附屬シテ
 其後荒木ノ源海ニ 寺務ヲ任可セシメケリ
 貞永元年壬辰 眞涼仲旬ノ不弟ナリ
 開堂経讀首尾調フ 聖人面授ノ不弟ナリ
 同茲窮紀ノ上旬ニ 華洛ヲ発足シタマヒテ
 邪見ノ群類化度セント 行路南山経過セリ
 東海道ニ発向シテ 伊勢太神宮ニ参詣ス
 是スナハチ先祖ノ靈廟 殊ニ国家ノ宗□□」(三〇オ)
 本地ハ西方弥陀如来 和光無跡ノ結縁ハ
 超世ノ悲願守護セシメ アラタニ祈請シタマヒヌ
 コ、ニ簪纓ノ神官アリ 聖人ヲ待居ル體ナリ
 前夜奇徳ノ夢ヲ感ス 大師ニ向テコレヲ述フ
 天照皇后神官ノ 崇ニ我ニ告タマハク
 翌朝未明ノ曉天ニ 蓑笠ノ客僧來臨ト
 瑞垣ノ内ニ請入スヘシ 親ク対面スヘキナリト
 シカルニ貴坊來向セリ 何ソ常人ニテハヲハスラン
 神勅ステニ炳焉ナリ 辭退ユメユメアルヘカラス

翻刻「尊師和讃」

朱ノ玉垣ヲシ開キ 正殿ノ石坪ニ奉入セリ」(三一ウ)
 桑名海崎ヲ行脚シテ 尾川津島ニ越度セリ
 海道遙ニ趣向シテ 喜平下旬ニ成ニケリ
 常州下妻小嶋ノ埠 郡司武弘カ許ニ下着ス
 昔日都ニ上リシトキ 親ク結縁シタマフナリ
 武弘ヲ相具シテ 吉水へ上人謁セシム
 往生極楽ノ安心ヲ 鸞師慇懃ニ示タマフ
 這ヨシミノ厚情ユヘ 京都へ使節ヲ奉リ
 念願招請申レケレハ マツ彼カ在所へ着玉フ
 化益台慢ナキホトニ 翌歳ノ朔易ニハ
 越後越中ニ経過シテ 信州上州再化セリ」(三一オ)
 同慈鴨月上旬ノ比 小嶋ノ武弘カ許ヨリ
 越ノ後州へ使シテ 頻リニ招請申サレケル
 聖人応諾シタマヒテ 翌年啓侯下旬ニ
 迎駕ニ乗御在テ 下妻ニ帰向セシメケリ
 同月下旬ノ掣ニ 武弘カコシラヘニテ
 真岡ノ判官兵部卿 三善カ息女給仕セリ
 四十三歳乾梅ノコロ 下野ノ国都駕ノ郡
 大沢掃部ノ頭友宗 室ノ八嶋ノ神宮ナリ
 聖人方へ使ヲ捧ク 僕近在所ニテ
 九尋無底ノ沢辺アリ 春秋二時ノ祭礼ナリ」(三一ウ)
 隣里ノ貴賤郡集ス 祭祠疎略ノ事アレハ

大慈大悲ノ迴向心 誥縁群類アサカラス
 主ノ妾媼タエカネテ 夫郎ニ諫言スルホトニ
 龐闌ニイサナヒ奉リ 不請弗省ニ供御セシム
 假睡ノ遊目モアラハサレ 終夜不退ノ称名ヲコタラス
 利益无窮ノコ、ロサシ 歡喜ノ御声殊勝ナリ
 伊勢モロトモニキ、トカメ 貴坊ハイカナル事故ニ
 无間ニ佛道トナヘシム 由来ヲ聞ト望ナリ」(二七ウ)
 聖人ソノトキノタマハク 生アルモノハ死ニ皈シ
 盛ナルハ衰老セリ 誰ノ人カハノカルヘキ
 出家モ在家モヘタテナク 三界六道ハ火宅ナリ
 苦域ヲハヤクマヌカレテ 不生不滅ノ国ニユカシ
 阿弥陀佛ノ名号ハ 上根下根ノ品差ナシ
 諸有衆生ノ誓約ニテ コレユヘワレラハ唱ルナリ
 聖人夜アケテ出タマフ 大假川ヲ越セラレ、
 宿主ノ二人追カケテ カタミヲ給リサウラヘト
 聖人ソノマ、留待シテ 懷中ノ筆ヲ取出シ
 九字ノ法名書タマフ 彼等ニ与タマヒケリ」(二八オ)
 同年辱取下旬マテハ 越ノ中後兩國ニ□□
 所々ヲ経廻セシメツ、 利益方便アリカタシ
 寿星上旬ノコロヨリモ 越ノ後州ヲ出タマヒ
 北陸道ヲ発向シ イソキ京都ニ上タマフ
 美域鹿遣ニ幼誠シ 喙敢サラニナキ程ニ

坂浴皓嘗ヲソレナリ 寶維ニ速クツキタマフ
 同月中旬ノ晚景ニ 空師ノ墳墓ニ参詣ス
 在世矜哀ノ慈恩ユヘ 涕泣悲涙カキリナシ
 サテ東山ヲ下タマヒ 尋有ノ僧都ノ里坊
 善法院ニ入御アリ カネテ季従ノ迎信ナリ」(二八ウ)
 勅使岡崎ノ中納言 範光朝臣ニコトハリ
 勅免ノ儀礼ヲ詔ヘテ 参内ノ祝儀ヲト、ナフ
 五年配所ノ居諸ヲフル 禿僧梵兒ノカタチニテ
 ソノマ、奏問シタマヘハ 陛下歡感ヲナシタマフ
 卿相雪客モロトモニ コレヲ大キニ褒美シテ
 右ノ肌衣ヲタマハリテ 許容ハ、カルコトナカレト
 聖人本懷トケタマヒ 慈円和尚ニマイラセラル
 喜悅ノ涙雨ノゴトク 昔日ノ重恩述タマフ
 卯信御房ニ対面アリ コレモ慈鎮ノ下知トシテ
 岡崎ノ庵室ニ同行ス シハラク□ニ逗留セリ」(二九オ)
 後ノ九条ノ殿下ヨリ 西ノ洞院莊園□
 結構掃除シタマヒテ 連ニ招請ナサシメリ
 茲歳舞射ノ中比ニ 江州荒木ノ源海房
 大師聖人ニ対悦ヌ ハシメハ台宗山門徒
 祖師聖光院入室ニ 无動寺ヨリ来臨シテ
 門下ニ参ラレタマフナリ 帰伏渴仰アサカラス
 大師聖人ニコトハラレ 山科ノ郷ニ寵地アリ

五年ノ居□ヲ経タマヘリ 秃爪梵土トウソウバンツと成タマフ（二五オ）
聖代建曆辛巳ノ歳 星記中旬第七日

岡崎ノ中納言範光卿 勅免ノ宣旨ヲ承タマフ
窮律二月二下着有テ 倫道宣旨ヲ傳上ス

清花ノ勅使ヲ承玉フコト 生前貴幸ノ面目ナリ
恐惶謹言之請文ニハ 愚禿親鸞ト書奏ス

陛下叡感ヲクダシ 月卿雲客褒誉セリ
鸞師勅免ヲ蒙リテ 鳳城へ人ヲ上セタマフ

空師ノ還洛ヲ聞タマフ 晩冬下旬ニ帰リケル
大師ハ相天下旬ノコロ 還御ノヨシヲ風聞ス

未都城ニ入りタマハス 勝尾山ニ登タマフヨシ（二五ウ）
當年北陸豪雪ニテ 往来ノ通路人跡ヲタエ

其年越後ニ逗留ナリ 神識飛行セシメケル
御都市四十ノ聖節ニ 漸ク雪漢ハレケレハ

旅行ノ企アハテ用意シテ 上洛伊ソキタマフナリ
国府平岡ヲ出タマフ 宿雪フカキ峻難所ケンナンショ

信濃路ニヲモムカセ 暫時ノ休息ナカリケル
上野ノ国四辻マテ出タフ 大師ハ孟陽下旬ニ

遷化ノヨシヲ告来ル 忽タチマチ悶絶胸痛セリ
血流通衢ニ流ケルカ 上洛ヲ早テモ詮ナシト

上野信濃ノ両国ヲ シハラク□化シタマフ（二六オ）
同年仲呂下旬ノ比 善光寺へ参タマヒ

翻刻「導師和讃」

一七日夜ヤコモチ夜答セラル 唯信无二ノ渴仰ナリ

満スル夜半ノネ一ツヨリ 丑三ツニイタリテソ
内陳鳴動スルホトニ 謹テ拝礼シタマヘハ

閻浮檀金ノ如来 直ニ出現シタマヒテ
聖人ニ対顔マシマセリ 伍頭合掌肝ニ銘ス

如来正クノタマフニハ 汝チ我タメニ裕磨セリ
仏胸ヲ休息セシムルコト 身滑識憐アサカラス

コノ身ハ玄ウツクキ閉帳ニテ 萬民ニ逢コトカタケレハ
這ヲ汝ニ聴容ス 諸人ニ対面サスヘシト（二六ウ）

真金色ノ生如来 分身セシメタマヒテソ
聖人ニ卑ヒキヤウ呪ナサシムル 身ノ毛脛テ拝受セリ

鸞師一生ノアヒタハ 渴仰隨身シタマヒテ
背負懸胸アサカラス 後ハ真佛坊ニ授ラル

戸隠山ニノホラセテ コ、カシコヲ上下セリ
熊笹ノヲレ有ケレハ 六字ノ尊号書タマフ

寺院堂照坊ニ給テ 末代澆季ニ至テハ
是且秘藏ノ宝物ナリ 衆人コレヲ頂拜ス

同年・寅中旬ニ 越ノ後州ニ還御アリ
梅雨車両ヲト、ロカス 柿崎ノ邑ニ躡オウキ躡セリ（二七オ）

小島ノ某カ門ニ拊ウツタマフ 主シ邪見ノ根性ニテ
内友ユルササリケレハ 欺コト咄トツタナリ風臥セリ

蚊虻集モンモウシツキ驚キ蕪ノコトク 監クワフカシキ股キ驗ケン囉ラ囉ラ針ニ似タリ

血涙サナカラ雨ノコトシ 愁声満天ニヒ、キ渡
遑ノ拜礼トテ 都鄙ノ衆類群集シ

「死出ノ山路ノ喧ク 行路ニ造次顛沛ス

道中示化ノ不思議ニハ 由良神崎ニ舟ヲヨス

道俗男女ムラカリテ 空上人ヲムサホリケル」(二三オ)

讃州塩飽ノ庄マテニ 奇特ノ怪事オ、カリケル

津々浦々ノ教化トモ 筆談ニハツクサレス

鸞師左遷ノ宣旨ヲ聞 嘉月十三日ノ暮方ニ

先師青蓮院エワタラセ 遑乞ニマイリタマフ

慈鎮和尚モ涙ニムセビ 聖人モタカヒニモノモノタマハス

トモニ袂ヲシホリタマフ 往昔師弟ノ好ミナリ

和尚愁涙ヲシト、メ 出家モ俗モ崔扁モ

恩愛ハナハタタチカカシ 範意童子ハカナシマジ

我方ニウケトリテ 御□ノカハリトカシツキテ

読書ヲコタリアルヘカラス 聖人喜悅シタマフナリ」(二三ウ)

今生ノ名残トカナシミテ 泪ニクレテ別タマフ

翌日十四日ノ夜ニイリテ 空師ノカタヘシノハル、

天台山ヲ下リテヨリ 六七年ノソノアヒタ

常随昵近アリカタク 恩芳蒙リタマヒツル

今宵カキリノ我ハ北陸ノ雲路ニ迷ヒ

師ハ西海ノ波濤ニウカフ 是ハイカナル薄縁ソヤ

上人モ紅涙ニシツミタマフ 明日ヲモ知ラヌ老ノ身ノ

再会イツト定ムヘキ 一蓮託生トハカリナリ

余所ノ見眼モヲソケレハ 速ニカヘラセタマフガ

タカヒニ観カヘリ察ラクリテ ナカキ離別トナリタマフ」(三四オ)

鸞聖人藤井ノ善信ト 俗名ラクタシタマヒテソ

配所越後ノ国府 五陽十六日ニ都ヲ出ツ

追捕ノ檢非違使ハ 宗府生小槻ノ行連

領送使ハ右衛ノ府生 鎌倉ノ秋兼ナリ

洛東岡崎ノ御房ヨリ 卯ノ一点ニ出駕セリ

師範ノ離京ヲ聞ニ湛スト 三時先達テ去タマフ

越ノ後州頸城ノ郡司 萩原民部ノ小輔

俊景カ預館ニ遣ハサル 田多ノ隼人北面ス

九条月輪殿ヨリハ 玉日ノ介錯朝倉主膳

伊賀守貞尚ヲ添テ 釵帯行程蔽密ナリ」(三四ウ)

都鄙ノ貴賤集リテ 離別ノ涙時雨ノコトク

悲泣天地ニヒ、キテ 適路朱ニ染リケリ

籠輿モ氣鬱ナリケレハ 剋々歩行ヲ望タマフ

往生ノ旅客ニ逢タマヒ 念佛教化センカタメ

去尽北陸道数十程 行路難山ニシモアラス

呼哀水ニシモアラス 人中反覆ノ問ニアリ

同年畏尽キ十四日 国分寺ノ謫舎ニツク

兆域境内狭少ニテ 勞悴イカ、トスカカフタリ

郡司夷祇ノ表問ニテ 東南平岡ニ寓舎ヲ造

コノ兩人ノ名僧ハ 流罪ノ宣旨ヲ蒙テ

下向セシメタマヘトモ 我身ノウヘヲカヘリミス

教化念佛シキリニテ ハ、カルトコロナキ程ニ

叡慮ニソムク故ニヨリ ツイニハ伏誅セラレタリ

善緯房西意ハ 摂津ノ国生田ニテ

佐々木ノ判官ウケタマハリ 誅^{チクリ}磔スヘキ宣旨ヲウク

アリフシ弥生ノ朔日ニテ 東天ノ日輪カキクモリ」(二二オ)

西ヨリ月ノ出ケルカ 車轟声スナリ

西意カ靈魂飛ノリテ 観音勢至トモロトモニ

来迎引接シタマヒテ 西方ヲ指テ行シムル

藤原ノ性願房ハ 二位ノ法印尊重ノ

竹田ノ辻ヨリ引卒シ 江州志賀ニ送ラル、

イツレモ奇瑞ノ往生ニテ 権化ノ再来ウタカヒナシ

後代ノ龜鑑クモリナク 翰墨子細ニツクサレス

好覚房ハ伊豆ノ国ニ長ス 彼国ニ三年居住シテ

病ノ床ニ臥タマヒテ 奇特ノ往生トケラレタリ

法本房ハ佐渡ヘ配流 成覚房幸西聖ハ」(二二ウ)

阿波ノ南戸ニ移ス コノ兩人ハ召カヘサル、

小板ノ善恵證空房ハ 无動寺ノ大僧正

法縁ノチキリ有故ニナタメテ 預リタマフナリ

鶺ノ木ノ證空申サレケルハ コレホド浄土真宗ヲ

拉メラレタル時節ナレハ 上人モ念佛遠慮アルヘシ

翻刻「尊師和讃」

大師上人ノタマハク 法藏菩薩ノ誓願ハ

愚蒙ヒトリニ痛勞ナリ 報尽謝徳ノタメナラハ

舌ヲ八分ニサカレテモ 骨髓ヲ粉ニクタク

カハネヲ路頭ニサラストモ 念佛停止ハスマシトナリ

小板モカヲヨハスシテ 鸞上人ヘマイラレテ」(二二オ)

念佛停止ヲイサメラレ 世上ノ安否ヲカタラル、

善信上人ノタマハク 自身自力ノ才覚ニテ

トナフル処ノ佛号ナラハ 進退ハイタスヘキガ

仏智廻向ノ信ヨリモ 自念ト称名アラハル、

善信房カハカラヒニテ 唱不称ハカナハヌナリト

御弟子達数輩ニテ 諸方ノ辺州ニツミセラレ

歳霜ヲ、クラル、 死罪流罪アハレナリ

已上百二首五十一丁

空上人配所土佐ノ国 罪名藤井ノ元彦

浅黄ノ直衣立烏帽子 流人ノ形容見苦シ」(二二ウ)

小松殿ノ小御堂ニ 三日逗留シタマフカ

追立ノ官人催促ス 名残ヲシクモ出タマフ

鳥羽ノ造^{ツクリモノ}徑ヨリモ 御艘ニメサレタマヒテソ

西海ノ波ニタ、ヨヒタマフ 言語道断ノ風情ナリ

年来教化ヲ受シ老若^{オシロハナシ} 瞋ニサ、クルモノハタ、

皇鐘愛ノ女房達 剃髮染衣シタマヒ□□「へ一八ウ」
 大師ノ所為ニアラサルナリ ワレラ二人ノ仕業ナリ
 トカナキ師匠ノ身ノ上ニ 弟子ノ科罪ヲユツルコト
 八逆罪ニコエタレハ イマハ白状マウスナリ
 首刎ノイトマヲ速タヘ 空師ノ雉京ヲ聞ヌ間ニ
 死出ノ山路ヲコヘナント 涙ト、モニ呼ナリ
 月輪殿兼実公ハ フカクイタハリタマヘトモ
 近衛ノ大将ユルサレス 各々死刑ニ逢タマヘリ
 カナシキカナヤ安楽房 都ハ六条河原ニテ
 永井ノ左衛門忠経 無慚ニ首ヲハネヲトス
 虚空ニ音楽キコユレハ 念珠ヲクルコト百余遍「へ一九オ」
 飛タル頭ノ称名ハ 一千遍ニヲヨフナリ
 太刀取不思議ニヲモヒケリ 見聞ノ諸人モロトモニ
 感涙肝ニ銘シツ、 袖ヲシホラヌモノソナキ
 住蓮房ハ江州ニテ 佐々木ノ判官吉実
 馬淵ノ卿ニヲモムキテ アヘナク誅シ申スナリ
 頭ヨリ光ヲ四方ニハナチケル 異香薫シテ音楽アリ
 コレモ胴ニ念珠ヲクル 空ニ三尊アラハレタリ
 二人ノ僧ノ雉京ニハ 五条ノ橋ヲ通ルトテ
 空師ノモトヘフミヲ遣 立ナカラノ草書ナリ
 マレニ人界ニ生ヲウケ ツキニノカレヌ死ノ途□□「へ一九ウ」
 法ノ為ニ身ヲ捨ル 果報ノホトコソ喜ケレ

大師ノ恩ノ深キコト 滄浪海モイソナラン
 高キコトヲ喩ヘシニハ 蕪迷廬山モカズナラヌ
 極楽ニ参ランコトノウレシサニ 身ヲハ佛ニマカセツルカナ
 トモニ涙ニカキクレテ 恐惶シテソヲクリケル
 二人別ノアハレサハ 目モアテラレヌ気色ナリ
 安養浄土ノ対面ト イサミテ屠所ニ至ケル
 カレラ二人ノ消息ヲ 大師ヒラキテ見タマヘハ
 ケナケニモテナス風情コソ モダエコカレテ鳴タマフ
 浄聞坊ハ備後ノ國 □川庄ニテ誅セラレ「へ二〇オ」
 橘左近将監沙汰シテ 首ヲハネントセントキニ
 眼暗テ倒レフス 虚天ニ声ノアリケルハ
 コノ念佛ノ行者ヲハ 汝ガ手ニハワタサヌナリ
 地藏菩薩ハ影向シ 錫杖ニトリツカセ
 西天サシテ飛タマフ アキレハテタル不思議ナリ
 禪光房ハ伯耆ノ國 寺田ノ郷ニテ誅セラル
 海老名藏人ウケトリテ 無慚ニコレヲ害スナリ
 大仙権現アラハレテ 蓮華部ノ教主ナリ
 ワレヲ僉者ニ立タマフ 妙□菩薩ハ我コトナリ
 頭モ胴モコトコトク 金色ノ舍利ニ変□ナリ「へ二〇ウ」
 奉行不思議ニオモハレテ 国主ニコレヲ訴エケル
 山名利景出見シ 奇異ノ思ニフシヲカミ
 勝地ニ靈廟立ラレテ 金剛舍利寺と名ケタル

マコトスクナキ我身ナリ 大師ノゴトク信ヲエテ
 往生トケタキモノナリト 何モ同意ニ□ヲレタリ
 善信ヒトリ言ハク ワレハ左ニハラモハレス
 大師ノ信モ我信モ スコシモ別ヘカラスト
 人々トカメテノタマハク ハ、カリヲ、キ善信房ノ(一六ウ)
 師弟懸隔ノ信ナルヲ 同意トイハル、子細ナシ
 綽空師ノ言ハク 深智博覧ニ同トイハ、
 應化ナクモアルヘキカ サラサラ自身ヲタカブラズ
 他力譲与ノ信心ハ 大師モワレモ一ツナリ
 自行ハケミノ上ニコソ 品々差別アルヘキナリト
 問答往復カマビスシ 大師上人聞シメシ
 信心ノカハルトイフハ 自力ノ信ニトリテナリ
 自業ツトメノ上中下 智恵格別ニ信マタ差降
 精進退随ノ不同ユヘ 根機ニ強弱階位アリ
 他力ノ信心ニオイテハ 善悪ノ凡夫一同ニ(一七オ)
 弥陀廻向ノ信ナレハ 因ニ不同ノカハリナシ
 果上ニライテ大涅槃 无导妙證ノサトリニテ
 善信房モ源空モ 信ニカハリハアルヘカラス
 源智房ヲハシメトシテ 各々屈服シタマヒテ
 礼敬ハナハタ重クシテ □ヲ開テヤマレケリ
 黒谷ノ先徳大知識 浄土宗弘教アレハ
 南北ノ碩才鬱憤ス ツ井ニ奏達トケニケル

翻刻『尊師和讃』

山階寺ノ学徒達 太上天皇イミナ尊成
 今上イミナ為仁土御門 強訴ニヲヨヒ止事ナシ
 聖曆承元丁卯ノ歳 夷鐘上旬ニ奏達ス(一七ウ)
 主上臣下法則ニ違シ 曠ヲナシ怨ヲムスフ
 僧衣ヲ改メ袈裟ヲハク 烏帽子直衣蒙シメ
 各々俗名タマハリテ 遠国所々辺諂ス
 白河上皇ノ北面ニ 主馬ノ判官盛久
 出家シテ空師ノ弟子 安楽房トナツケタリ
 勢州戸波ノ住人ニ 次郎左衛門信国ハ
 発菩提心弟子トナル 清原ノ住蓮房ト名ク
 件ノ両僧同道シテ 法性寺殿ニ参タル□
 帰坊便宜ノヨリフシニ 内裏ノ前ヲトヨリケル
 輪王ノ位タカケレトモ □□ヒサシクト、マラス(一八オ)
 天上ノ楽ヲ、ケレトモ 五衰ハヤク来ルナリ
 南无阿弥陀佛ト高声ニ ウタウテ通りケルホトニ
 念佛禁制ノ高札ハ 四方八面ニタテラレタリ
 コトサラ御殿ノ前ニシテ ハ、カリオホキ悪僧カナト
 守門ノ官者一同ニ ハシリ出テソカラメトル
 近衛ノ籠ニ禁断ス 便宜ノアシキヨリフシニテ
 イタハル者ハナキホトニ 警固キヒシクミヘニケル
 住蓮安楽モロトモニ 大音声ニノ、シリテ
 獄屋ノ官ヲタノミツ、 死刑ヲイソキ奏達ス

聖人三十三歳ニテ 花老中旬脯時ニ

空聖人へマイラル、ヲリフシ貴前二人モナシ

法然上人ノタマハク 禅定殿下ノ敝命ニテ

撰撰本願念佛集 撰考セイムルトコロナリ

汝ハ秀器付属スル ヒソカニ校舎書写スヘシ

善信拝聴感涙シテ 庵室ニカヘリタマフナリ

稽首薫香尊重シ 管城藤角結構シテ

推金垂雲アサヤカニ 梅天中旬功就リ

内題次位ノ二十四字 禮紙ヲアケテ尊望ス」(一四ウ)

空師染翰シタマヒテ 蔡葉シタシク授與セラル

同日即座ニ誠惶シテ 敝師ノ寿影ヲ恐望ス

尊命マコトニアリカタク 恩許蒙リタマヒケリ

縞紵ヲシタ、メタマヒテソ 写照丹青セシメケル

同年閏ノ夷則ニハ 真翰ヲ染テ寿銘セリ

善信聖人アルトキニ 源空大師ノ貴前ニテ

年来教化ヲウケシ中 同室好友アリカタシ

浮生ノ思出コレナリト 且ハ當来ノ親友

報土往生ノ解了コソ 自他オナシクシリカタシ

御弟子達参集ノ時 出言ツカウマツリテ」(一五オ)

人々ノ心底ヲウカ、ハント スコシク申シ上ラレタリ

大師上人ノ仰ニハ コノ条一段シカルヘシ

明テ各々来臨ス 即座ニ申サレ出スヘシト

翌日面々参来セリ 聖人披露アリケルハ

行念信念ニ不退ノ 両座ヲワカチタマフヘシ

各々意趣ヲアカサルヘシ 三百八十余人ノ衆

其意ヲエサル気色ナリ 帳ヲヒカエテ待タマヘリ

トキニ法師大和尚位 信空上人法蓮房

信不退ノ座ニツカント ス、ミ出サセタマヒケル

熊谷入道法力房 遅参シテ申テイハク」(一五ウ)

善信房ノ御執筆ハ 何事ニテカ候ラント

聖人答シテノタマハク 行信不退ノ別チアリト

真実入道申テイハク シカラハ某モルヘカラス

先達房ハタレタレソ 聖覚信空兩人ナリ

アラ口惜ヤラクレタリ 信心不退ニ参ルヘシト

聖人コレヲ書ノセタマフ コ、ニ三百八十人

行不退ノコ、ロニテ 無音ノ時剋ウツレケル

シハラク有テ聖人ハ 愚蒙モ信心不退ナリ

自名ヲ書ノセタマフトキ 大師モツ、井テ信不退ト

数多ノ御弟子一同ニ 鬱氣ノ色ヲアラハシテ」(一六オ)

敬屈ノ礼ヲ尊重シ 退散セシメタマフナリ

聖人三十四歳ノ時 吉水へ参集アリ

オリフシ聖信房湛空 ヲナシク勢観房源智

念佛房念阿弥等 ナカニモ念阿申サレシ

浄土ヲネカヒ往生ヲ期ス 凡夫心コソアサマシケレ

入里乞食障一比丘 三衣一鉢ノ頭陀ヲ行ズ」(一三〇)
專修專念道綽ノ 遺戒教示ヲ用心シ
現師ノ名字ヲユルサレテ 綽空ト改号シタマヘリ

已上百十六首五十八丁下有

西岡崎ノ辺ニテ 小室シツラヒタマヒテソ
給仕ノイトマ有時ハ 蓬戸ヲ閉テ念佛ス
聖人桂月ノハシメニハ 青蓮院へ步行セリ
慈円和尚ニ対覽アリ タカヒニ涙欄干タリ
院主シハラクシタマヒテ 北岳ノ龍象ナリ
三塔ノ明珠至宝ト 眉目開悦セシムルニ
無狀棄門ノ身トナリテ 山ヲ疎捐シタマフコト」(一一二ウ)
遺恨カキリナキホトニ 盲瞽ノ枝ヲ失ヘリ
広覚發明ノ達者 神道和尚名譽ニテ
高間ノ原ノ霞暗レ 岩戸ノ奥モ晶ケリ
二十年来親慙シ 哀愁袂ヲウルヲシテ
形影ヘタテナキモノヲ 老納癩瘁トナリニケル
今日来應ナノメニテ 向顔ハナハタウルハシク
往昔キハラヌチキリソト 悔恨スコシモナカリケル
聖人イトマヲ乞タマヒ 卓床ヲ降ラセテ
聖光院へ入御アル 僧官候人集会セリ

翻刻『尊師和讃』

庭上ニ頓首ヒレフシテ オノオノ合掌涕泣ス」(一三〇)
即日大乘院へ登山ス 衆徒ハ拳テ悲哀セリ
无動寺ニ一宿シテ 三塔巡拝アリカタク
當山ノナコリモ今日限り 昔ノ祈請ヲ謝シタマフ
供奉ノ加道扈從衆 侍從正全眞然房
木幡ノ民部法橋ト 岡崎ノ坊ニカヘラシム
同年夷鐘ノ中旬ニ 四天王寺へ参籠アリ
持念ハナハタ嚴重ニ ムカシノ院主謝報ナリ
同月下旬ニヲヨンテハ 儀長ノ郷ニヲモムカシメ
参月三夜ノ念誦ナリ 靈告ノ密恩謝シタマヒ
帰路ノツイテト覺□テ 法隆寺ニ参詣セリ」(一三ウ)

覺運僧都ニ逢タマヒ 其夜ハ寄宿セシメタリ
芳談慙懃アサカラス 翌日帰京ナリケルカ
柞杜マテヲクラレテ トモニ拔鼻ノワカレナリ
三十二歳ノ姑洗ヨリ 小坂ノ證空モロトモニ
兼実公ノ知識トナル 感涙袖ヲウルヲセリ
同年正幼十八日ニ 裙布玉日ノ姫ハ
六角堂ニ参籠アリ 夜ノ子ヒトツ寅ミツマテ
大悲救世觀自在 二ノ玉ヲサツケラル
問ミテイヤナル錯落ゾト 答シテ夫婦忍身ナリ
左手ノ一顆阿弥梨吉耶 右手ノ一珠ハ婆婁吉底」(一四〇)
日比ノ雲霧モハレユケハ 玉日ナヲナヲホアラヤナリ

七

覺悟アルコソカナシケレ 努々他言アルヘカラス
 民部卿法眼ハ 青蓮院ニカヘラレテ
 ユヘナク返事ヲ申上ケ 密意ハ堪忍セラレタリ
 舞射中旬ノコロヲヒ 台徒ノ普宿八十口
 尊老慈円ヲ導師トシ □日奢摩他ヲ親セ□□(一〇オ)
 聖明堂ノヒシリタチ 安居院ノ法印聖覺
 静敵僧都竹林房 イツレモ名聞スクレタリ
 師弟朋友ノチキリモ 秘心ノ名餘シノビカネ
 七月満座慙懃ニ 終月和歌ノ御会アリ
 侍従法橋ノ使ニテ 南都ノ覺運僧都ヘハ
 僧迦梨衣一條ヲハ 進送セシメタマヒケリ
 仁和寺ノ慶尊ヘハ 爵多羅僧衣ヲ送ル、
 イツレモ王童アヒソヘテ 隱遁ノ形見トオホシメス
 鴻鈞上旬二十九歳 聖光院ノ本房ニテ
 法華三昧八講会 台徒ノ高名□□□(一〇ウ)
 遁世名餘ノ識底ニ 慙重敵密馳走シテ
 忍涙止コトナキホトニ オノオノ不審シタマヒケリ
 大乘院ニカヘリ居テ 六角堂ヘカヨハシメ
 一百日夜慙懃シ 知識ヲ祈誓シタマフナリ
 已前三年ノ春秋ニハ 根本中堂ニ歩行シテ
 苦海ノ衆生ヲ度セントテ 善逝医王ヲ千拝ス
 乾梅下旬ノムマ満ニ 四糸野灼ノ中途ニテ

聖覺法師ニ逢タマヒ 不尋気色ニ見ニケル
 安居院トカメテ言ハク イツチノ行却ト問タマフ
 モトヨリ教示ノ親ニテ 心底震テ述タマフ(一一オ)
 大和尚位法印ノ 指南ヲ踊躍シタマヒテ
 勢至菩薩ノ道場 称見セシメタマヒケリ
 僧都範宴少納言 吉水ヘ出立アリ
 天台山ノ門跡ナリト ヨハル、ホトモ今日ハカリ
 白衣ノ装束安陀衣等 ミヤビヤカニ着セシメ
 供奉ノ僧官数多ニテ 飛車ヲハヤメテ轟シム
 新黒谷ニイリタマヒ 源空法師ニ対閱ス
 上人左右ナク受拜シテ 出離ノ要路ヲ問答ス
 聖道難解ノ法問ハ 上智達者ノ修行ナリ
 他力専修ノ直道ハ 下根愚蒙ノ燈果ナリ(一二ウ)
 五逆十惡モロトモニ 廻心懺悔スルトキハ
 三從五障ノ女性マテ 皆得往生疑ヒナシ
 執持名号了得シ 僧正紅衣ヲ改ラレ
 黒衣ノ道心発起シテ 名利ノ山ヲ下リタマフ
 供奉ノ官者ニイトマラタビ 空車ヲ引テ帰リケル
 別離ノ涙タモトヲ染メ 泣々山門ニ入ニケリ
 昨日ハ三千ノ冠主ニテ 錦繡ノ褥ニ豊座シ
 翠簾華車ノ往来ニハ 衆徒ノ拜趨膝ヲ屈ス
 今日棄門ノ孤独トナリテ 布ノ衣ニ身ヲヤツシ

義龍義虎ト対論シ 甚深妙秘ヲ研究ス
 華嚴佛心ノ即頓ハ 碩学光俊房ニ相玉ヒ
 俱舎成実ノ所作弁事 八宗九宗ヲ広度セリ
 十九歳ノ鴻賓月ニ 河州儀長ニ參詣ス
 三月三夜ノ祈籠ニテ アラタニ靈夢ヲ蒙シム
 我三尊化塵沙界 日域大乘相□□
 諦聴々々我教令 命終速入清浄土
 汝命根應十餘歳 善信々々真菩薩
 建久第二辛亥歳 □□中旬第五□□(八オ)
 午時初刻記前夜 □□畢佛子範宴
 深奥秘藏无口外 正□房書記拜見□
 靈現ハナハタ覚束ナク 猶豫胸臆ニマシマスカ
 建仁第一戌亥ノ曆 年齢二十九歳ナリ
 吉水ノ禅室參タマヒ 浄土易入ノ門ニ入り
 他力往生ノ意趣ヲ聞 真実報土ヲ願ハシム
 当時夢想ノ真告ヲ 思惟工夫シタマヘハ
 感應道交アリカタク 憶談疑網破タリ
 聖人二廻ノ來鐘ニ 慈円和尚ノ懇望ニテ
 大乘止観ヲ講セシム 古今未談ノ妙弁ナリ(八ウ)
 尊師歓悦アリカタク 奏聞參内シタマヒテ
 聖光院ノ門跡トシ 威風四海ニヒ、キケリ
 次歳修禊ノ中旬ニハ 釈迦弥陀薬師ノ三尊ノ

翻刻『尊師和護』

ミツカラ造営セシメテソ 院房ニ安置シタマフナリ
 落慶ノ導師ニハ 僧正大師ヲ上首トシテ
 台嶺ノ高僧百口ト 七月法華ノ八講アリ
 継年酷暑ノハシメヨリ 山階寺ニ隠居シテ
 三世諸佛ニ祈請ヲナシ 一代藏經披閱セリ
 山家西塔ニ帰壇シテ 三塔ヲ巡拝ナサシメテ
 経律論ヲ穿鑿シ □□法ヲイノラ□□(九オ)
 先蹤イマニタエハレテ □□巡礼ノ僧徒□□
 南無親鸞大菩薩ト □華ヲ捧テ通ナリ
 同年同師ノ所望ニテ 華嚴講談セシメケリ
 先代未聞ノ詞弁ヲ吐 今ノ良弁僧正ナリト□
 窮陰上旬ノコロヨリモ 无動寺ニ籠閑シ
 密行修法セラレケル 侍従正全不審セリ
 相戸ニ耳ヲソハタテ、 様躰ヒソカニウカ、ヘハ
 孤燈カスカニ南面シ 趺坐合掌シタマヘリ
 太子御廟ノ靈告ヲ 再返唱吟シタマフカ
 丹誠金鉄徹透シ 悲泣雨涙哀ナリ(九ウ)
 僧正慈円ノ方ヨリモ 木幡ノ民部ノ使ニテ
 登山案内静謐ニ 密法修練ヲウカ、ハシム
 坊官下山ノオリフシニ 正全門外ヘラクラル、
 コノタヒノ密行コソ アハレカナシキ別意ナリ
 僧正坊ニハツ、マレヨ 今年遷化トオボシクテ

合掌又手シ礼拝ス 南无阿弥陀佛ト初言セリ
 重歳次第二發明シ 摻捏佛像造ノタハムレ
 楊枝ヲモツテ画レハ 自然ト彌陀ノ□容ナリ」(五ウ)
 盛衰興廢ノ世ノナラヒ 崇徳新院ノ□□□□
 判官為義ヲ召ホトニ 是非ニヲヨハス御方セリ
 御運ヒラカセタマハネハ 新院讃州二辺謫ス
 六条ノ判官カ同族ハ ノコラス伏誅セラレタリ
 四条ノ少將有範ハ 為義ノ婚姻ナレハ
 同心罪科ハナケレトモ 家督ヲ没取セラレケリ
 五葉丸浅丸殿トハラカラヲ 宇多ノ局トモロトモニ
 範綱卿ニアツケラレ 其身ハ遁世シタマヒキ
 宇治ノ三室ニ隱居シテ 大進入道トナリタマフ
 安養世界ヲ恋慕シテ 念佛三昧勤修セリ」(六オ)
 悲キカナヤ有為無常 □□□□□□
 南訛中旬第八日 父有範ハ卒去セリ
 鐘愛サラニカナハネハ 宇治ノ岡田ニ葬斂シ
 服忌オモクツ、シミテ 追善日々ニヲコタラス
 五歳六歳七歳ニハ 中四位上宗業ヲ
 書礼ノ師匠トタノミツ、筆道達者ニ学文セリ
 阿伯從三位有綱ヲ 神道和哥ノ師トセラレ
 中臣ノムカシヲトムラヒテ 天文地理ニ明白ナリ
 聖人八歳ニナリタマヘハ 春風桃李ノカナシミ

大悲ノ母公吉光女 イサ、カノ所勞ニ伏シ玉ヘリ」(六ウ)
 生年三十七歳ニテ 皇月至道ニ入タマフ
 無生忍ヲサトラシメ 泥洹至道ニ入タマフ
 カナシミ際限ナキホトニ 孤子トナリタマフ
 母公ノタメノ追福ニハ 旦暮法華経誦誦セリ
 幼童コ、ロニ思慮アリ 浮生一旦ノ栄花コソ
 電光朝露ノタノシミ 夢中ノ言嘩明メリ
 伯父範綱ニ訴詔アリ 敵父最期ノオリフシニ
 出塵スヘキ遺言アリト 悲母ノオリオリノタマヘリ
 剃髮染衣ノ身トナリテ 登壇授戒ノ師ヲタノミ
 輪廻生死ノ門ヲイテ □□ノ道ニイソカ□□」(七オ)
 懇望頻ニノタマヘハ □満□□上範綱□
 止事ナケニ思ハレテ 青蓮院ヘ勸引ス
 僧正慈円ニツケシメテ カサリヲ捨シメタマヒテソ
 改名範円少納言 三皈戒ヲ具足セリ
 十歳已上ノ時分ニハ 睿峯ニノホラセタマ□
 竹谷ノ静敵房ニ遇タマヒ 四教円融ノ義ヲ明メタリ
 大乘止観ノ法門ハ 本師僧正ニ相傳シ
 唯識百法ノ口傳ハ 毘沙門堂ニ受読セリ
 法相三論ノ深奥ハ 権律師空円房ト
 覺運僧都ニ受タマヒ 因明秘法ヲ口決セリ」(七ウ)
 金胎兩部ノ曼陀羅ハ 明禅房ニ傳授シテ

貴賤縮素ノトモカラモ 奉讃セサルモノソナキ
 日本六十余州ニハ 四十六箇ノ伽藍ヲ建
 八宗堅固ニ勤行シ 梵貝天ニヒルカヘル
 荒陵ノ地ヲアラタメテ 四天王寺ヲ建立シ
 水想觀ヲオコナヘハ 彌陀ノ三尊來迎ス
 ナカニモ法隆寺問寺 夢殿ニ禪定シテ
 般若台ニカヨハシメ 未然ノコトヲシメシケル」(三ウ)
 上宮王子ノ遷化ヨリ 五百餘歳ヲウチスキテ
 高祖聖人出現シ 念仏門ヲヒラカシム
 鼻祖聖人ノ俗聖ハ 天八下ノ尊ヨリ
 五十二代連続シテ 国家ヲ治ル朝臣タリ
 食子ノ卿 大織冠 藤原ノ姓ヲタマハリテ
 イルカノ逆臣降伏シ 大和ノ国ニ鎮座セリ
 祖流ツ、イテ十七世 天ノ児屋根ノ尊ヨリ
 君臣ノ礼ヲ重シテ 政道サラニオコタラス
 神護景雲年中ニ 三笠ノ山ニアトヲタレ
 法相應護ノ神トナリ 因明論ニアフレタリ」(四オ)
 不比等房前式部卿 宰相中將ノ曾孫
 歌道ノ長者ナリケレハ 攝政清花ノ師トナレリ
 敵父有範卿ヲイヘハ 後白河ノ近從ニテ
 皇太后宮ノ内大臣 花山ノ峯ニカ、ヤケリ
 愛恋悲母ノ姓系ハ 源家ノ嫡流義親ノ息

翻刻『尊師和讃』

六条ノ判官為義ノ 伏女吉光女ト申シケル
 承安三年 壬辰ノ事 純陽朔夜ノ枕頭ニ
 菩薩一人來現シ 崇ニ告命マシマセリ
 五葉ノ松ヲ持來シテ 汝ガ願望ハタスヘシ
 コノ松ノメト告タマフ 女性ノ識ニアヤシメリ」(四ウ)
 再三ニシテ言ク 男子ヲ祈請スルユヘニ
 秘妙ノ方便ナリケレハ 恠心ヲナスコトアルヘカラス
 婦人神ニ喜悅シテ 口ヲ開キ笑タマヘリ
 二尺計ノ常盤木ヲ 喉中ニナケ入タリ
 枝葉スコシモサハリナク コ、ロヨケニ吞タマヘリ
 懷孕覺アルホトニ 一十二箇月ヘタマヘリ
 承安三年癸巳事也 青和朔日没シ
 黄昏時トミルラクニ 音楽天ニキコエケル
 三星圍繞一輪ノ月 口ヨリ飛テ出タマフ
 女孀オトロキミルホトニ 美麗ノ幼兒床ニアリ」(五オ)
 大進中將來入シ 錦□□キニウケタマヘリ
 五分法身ノ薫シテ ナカク局ニキエサリケル
 靈現表示用進シテ 聖人ノ振名ヲハ
 五葉丸トナツケタル 法枝サカンノ瑞夢ナリ
 超世ノ誓約ムナシカラス 一一ノ願他ヲカラス
 第十八ノ王本願 三信具足一心ナリ
 二歳ノ中秋三五ノ月 西方ニムカヒ七歩シ

文殊普賢ヲイサナイテ 如来ノ化導ヲタスクルト」(一〇)
 六道四生ヲヘメクリテ 苦患ノ群類ミルトキハ
 悲哀ノ涙タエカタク 休息セシムルコトソナキ
 三明曼字ノソノムカシ 羅閱祇城ノ精舎ニテ
 楞嚴定ニイリタマヒ 二十五圓通説タマフ
 乃往久遠無数劫ニ ホトケ出生シタマヘリ
 觀自在王トナツケタリ ハシメテ發生菩提心
 楞嚴会场ノ砌ニハ 阿利耶婆婁枳底砌
 耳根円通シタマヒテ 旻生三摩地ヲサトルナリ
 西印度ニアラハレテ 童壽法師トナツケツ、
 諸經衆論ヲ翻訳シ 龜茲王ニ称セラレ」(一ウ)
 姚秦ノ弘始三年ニ 長安秦王ニ見エタリ
 草堂寺ニ住セシメ 三千ノ徒ヲ導ケリ
 幼年九歳ノ時分ヨリ 外道梵士ト對論シ
 弁舌博覧比類ナク 邪鋒ヲ碎テ名ヲ振
 旧經ヲ參定シタマヒテ 神情鑑徹ホヤラトナリ
 毘婆尸仏ノ過去世ヨリ 七仏出世の記者ナリ
 正法ノ時機モスタリテハ 像季ノニウツルカナシサハ
 戒定恵ノ三学モ 修行ノ人ソ希ニナル
 震旦国ニ來生シテ 玄閑菩薩トアラハレタリ
 諸方ノ道俗モロトモニ 西利指南ノ導師トス」(二オ)
 往昔陶居ニアヒタマヒ 仙術学問修セラレテ

延年転壽ノ法ヲキ、 四論ノ奥義ヲノヘントス
 大集經ノ疏ヲ制シ 幽玄深秘ヲアラハシテ
 殊勝ノ法門ヒラキツ、 一切衆生ヲ化度セシム
 河西ニトリタマフトキ 三藏学希ニアヒタマヒ
 十六妙經サツカリテ ソレヨリ仏經ステシトキ
 婆藪盤頭ノ優婆提舍 注釈微細ニアラハシテ
 一法句ノ妙門ヨリ 二十九種ニヒラキケル
 定業カナハヌ世ノナラヒ 六十有余ノ者ノコロ
 カリノ宿ヲスツル身ソ 須摩提利ニカヘラシム」(二ウ)
 唐ノ玄奘三藏ノ 七百徒弟ノ僧綱ニ
 三車法師トトナヘラレ 律家耳目ヲオトロカス
 世親菩薩ノ俱舍唯識 因明論解ノ疏述アリ
 諸宗学者ノ所用ニテ 資師相承ノ口決ナリ
 末法万年トキイタリ 餘經失滅スルユヘニ
 彌陀ノ一教サカリニテ 西方要決著セリ
 唐帝ハナハタ崇敬ス 悲母傷哀ノタメニトテ
 慈恩寺ヲ創造シ 大師ノ勅号ラクリナス
 累世ツ、イテ出タマヒ 導綽善導ト分身シ
 師弟ハケミテ方便シ 安養浄土ヲス、メシム」(三オ)
 和朝將來ノハシメニハ 利利ノ家ニ宿住シ
 優婆塞円通シテ 諸宗ヲ建立セシメケリ
 八耳太子ノ教行ハ 秋津州ニ広益アリ

翻刻 『尊師和讃』

富山県立大学助教授 中 哲 裕

凡 例

- 一 これは波冲山文庫蔵『尊師和讃』の翻刻である。
- 一 翻刻に際しては、極力原本の字体を尊重することにした。
- 一 原本は虫喰いがひどく、判読にたえぬ場合は、その文字は□として空けている。
- 一 原本には書写者のものと思われる注釈が随所に付せられている。本来はその注釈などもともに翻刻されるべきであるが、本文の翻刻を第一義とし、ここでは割愛する。
- 一 各頁の終わりは、その場所と頁、表・裏を以下のように記している。
- 例 「(五オ) (この行が五頁表の最後の行である事を示す) 踊り文字は一字のものは原本のまま「、」や「々」を翻刻しているが、〳〵については仮名を繰り返している。
- 例 「オノノ合掌涕泣ス」↓「オノオノ合掌涕泣ス」
- 一 原本ルビは書写者によると思われるので、そのままここに翻刻す

翻刻『尊師和讃』

る。

- 一 濁点が打ってあるものは、そのままにしている。
- 一 書写者、原本への書誌的考察、『尊師和讃』の歌謡史における位置と意味、祖師伝説に対する考察など、数多くの問題は残っているが、別の機会に譲りたい。

本師善信聖人ハ 無量寿仏ノ化現ニテ
 十方有情ヲ引導テ 報土ノ門ヲヒラキケル
 本師親鸞大徳ハ 生年九歳ノ春ノコロ
 剃髮染衣ノ身トナリテ 菩提ノ道ニソイリタマフ
 本師聖人ノ俗姓ハ 天照皇大神宮
 四十五世ノ後胤ニテ 威勢トフトキ其身ナリ
 積尊出世ノ時分ニハ 中天竺ニ生ヲウケ
 婆羅門姓ニ宿セシメ 方便不思議ヲアラハセリ
 聖人ツネツネノタマハク 月氏国ニ在世シ